

鳥取県の西隣の島根県にも石見国(現在の島根県西部)、出雲国(現在の島根県東部)の国司として万葉歌人 柿本人麻呂、門部王が赴任しており、多くの歌が詠まれています。



柿本人麻呂は、700年代の初めに、石見国(現在の島根県西部)の国司として赴任したとされていますが、人麻呂に関する記録はあまり残っておらず、その詳細はわかっていない部分が多くあります。

飛鳥時代の歌人であらゆる面において新しい歌の世界を開いた歌聖とも言われ、作歌の量、質といい万葉の頂点に立つ一人です。歌の内容も多方面にわたり、荒都を悲傷する歌、皇子、皇女に関わる歌、妻に関する歌などが万葉集に収められています。人麻呂が残した多くの歌の中で代表作の一つが石見の地で歌った「石見相聞歌」であり、その歌のなかには、江津周辺の地名がいくつか詠みこまれています。



奈良時代の皇族であり、天武天皇の曾孫にあたると言われています。出雲国(現在の島根県東部)の国守に赴任したのは、720(養老4)年から733(天平5)年までのいずれかの時期と考えられています。

人間味豊かな歌人であり、万葉集巻三に「出雲守門部王、京を思ふ歌」として「飢宇の海の 河原の千鳥 汝が鳴けば 我が佐保川の思ほゆらくに」が収められています。飢宇の海は島根県の中海、佐保川は奈良の都を流れる川です。中海にそそぐ意宇川のほとりで千鳥の鳴き声が聞こえてきたため、奈良の佐保川を思い出し、遠く離れた都をしのぶ望郷の念を詠んだ歌です。この佐保川は、大伴家持の祖父 大伴安麻呂の佐保の邸で知られ、家持も住んだ邸宅です。佐保川右岸から北方の佐保山にかけての一带は、佐保の内とも呼ばれ、貴族の住宅地であり、門部王の邸宅もこのあたりにあったと言われています。